

## 第3回アジア養蜂研究協会大会

松香 光夫

アジア養蜂研究協会 (AAA) が主催する国際会議が 1996 年 10 月 6 日～10 日にベトナム・ハノイ市で開催された。主会場はホーチミン博物館である。26 か国 300 名以上の参加を得た賑やかな大会となった。第 2 回 (吉田, 1994) も盛会だと感じたが、今回はさらに盛り上がったものとなり、ボランティア的な意識で事務局を担当する私たちとしては、怖いような感じさえしたものである。

日本からも日本養蜂はちみつ協会とアサヒトラベルインターナショナル社の協力を得て、酒井哲夫 AAA 会長を団長とするグループと、玉川大学生を含むツアーの 2 旅行団計 25 名とさらに数名が参加された。

ベトナムは、最近になって養蜂に力を入れており、特にその力点を低所得者層の引き上げに置くようになってきている。このことは松香が 1995 年 2 月にベトナムを訪問した時には、農業食糧産業省の管轄であったものが (松香ほか, 1995), その後改組されて農業・村落開発省に移ったことにも表れているようである。国際会議の運営については不慣れで私たちの不安も大きく、酒井哲夫会長は 1995 年 11 月に現地査察をしたほどであった。特に予算面ではどうなることかと心配していたが、最終段階になってオランダなどからの援助も得られ、例えばパーティーの豪華さにはこちらが面食らった態であった。

日程を追って大会の様子を紹介しよう。

10 月 6 日は受け付け日、先に入っていた玉川大学グループがホーチミン博物館会場の展示ブースを整備したあと、夕刻からパーティー。最後の頃に酒井会長グループが到着して、ひと



図 1 会場となったホーチミン博物館

しきり盛り上がる。

7 日は早朝から準備, 9 時開会式。農業・村落開発省からは大臣の挨拶のほか、副大臣 2 名が出席されるという豪華メンバー。酒井哲夫会長の挨拶など開会のセレモニーに引き続いて、ポーランドのボイケ博士の特別講演「ベトナムの養蜂とミツバチ科学」。同博士は早くからベトナムの養蜂に深く関与し、ミツバチの病気発生でベトナムの養蜂が大打撃を受けた時の救世的存在であった。1985 年には研修のためベトナム人 3 名を連れて日本を訪れてもおられる。その時のハ氏はベトナム養蜂振興の中心人物だったが、昨年初めに急逝され、残念なことであった。今回は、そのお嬢さんが達者な英語で裏方を務められ、感慨の深いものがあつた。

その後、ミツバチ生物学のセッションに入ったが、この間、大臣ら一行は発表会場外側に設置された展示場を視察された。今回の展示は一部のアジア養蜂研究協会支部の展示に加えて、中国や韓国などから有料ブースの展示があり、思いのほか賑やかになっていた。日本からはミツバチ科学研究施設と、セラリカ野田の 2 つのブースが加わった。

ミツバチ生物学のセッションの冒頭に、2 つの新種が発表された。ドイツの Koeniger らがボルネオ山中に発見した *Apis nuluensis* と、カナダの Otis とインドネシアの Hadisoesoilo が組んで、インドネシアの *Apis nigrocincta* を報告したのである。以前は長い間ミツバチ属は 4 種からなるとされていたのであるが、数年前に 3 種が追加され、ここにまた 2 種が増え

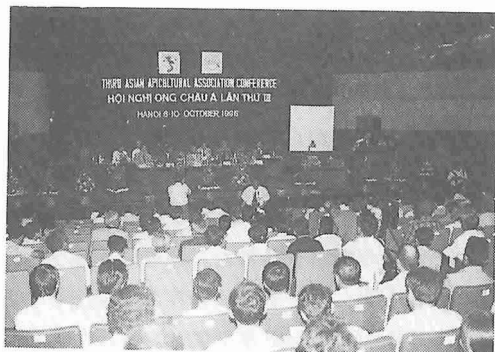


図2 開会式

た。インドネシアやフィリピンなどアジアの国々は多数の島からなっているところが多く、そのような地形では隔離によって独特の種が分化する傾向があることを考えると、まだまだ増えるものと思われる。このような状況が、AAAの活動が欧米の研究者からも重視されている要因ともなっているのである。

各セッションには、平行してポスター発表が行われた。興味深いものが多く、玉川大学関係の発表は4題あっていずれもこの日のポスター発表として組んであった。この他に吉田助教授は、インドネシアのグループと共同研究としてトウヨウミツバチの巣箱の改良についてのポスター発表が2日目にあり、ベトナムのグループが8年間にわたって養蜂プロジェクトを発展させた過程に関与したとして松香を共同発表者に加えたポスターが、3日目に張り出され、光栄なことであった。これらのポスターの発表会場はやや離れた2階にあり、時間的にも忙しく、場所的にも不便だったせいで、各セッションとも座長を通して盛んにPRしたのだが参加者は多いとはいえずに、寂しい感じがした。

夕方はビデオ、スライドの会。部屋・機械類の準備が悪く開始に手間取ったが、充実した内容であった。

2日目の分科会は講演者のキャンセルが多かったため、午後に予定されていたものを繰り上げて午前におさめ、養蜂技術、生産物、花粉媒介を取り扱った。従って、午後の前半が空いたので、昨晚に納まらなかったビデオ、スライドを鑑賞した。

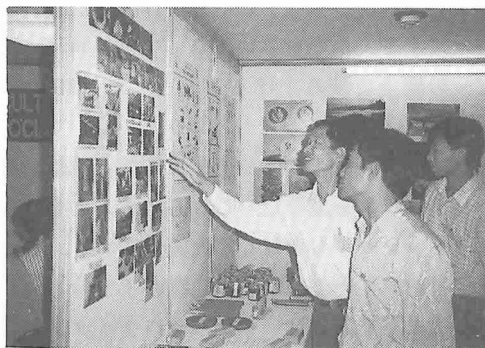


図3 ポスターの前に活発な意見交換

その後、AAAの総会。私自身は事務局長として、酒井会長、タイのウォンシリ副会長と一緒に議長団をつとめ、最も緊張した時であった。はじめに酒井会長が、ご本人の引退と後任会長を松香に譲る希望を表明する挨拶をされた。その後、報告事項、議事に入る。2年に一度の総会で役員的人事や、活動方針が採択されるのであるが、会長の交代が認められたので、玉突き的に人事に異動があった。まだ組織の固まっていないAAAであるので、3役は玉川大学で担当させていただくこととし、事務局長に吉田忠晴助教授、会計に中村純講師をお願いした。副会長はタイのウォンシリ、インドのベルマ両博士の留任。会則は3人目の副会長を置くことになっており、女性の候補も挙げたが、次回に持ち越させてもらった。AAAには7つのセッションがあり、これまで委員長が1名ずつ決まっていたわけだが、それぞれに2~3名を配して、今後の活動の実質化を狙う布陣とさせていただいた。一部には後ほど追加があり、最終的には本誌前号の役員構成となった。

2年後の第4回大会の担当地については、事前に動きのあった西オーストラリア、マレーシアの話がいずれも進まずに心配していたが、大会の直前から期間中にネパール、中国（雲南）、韓国、トルコと申し出が相次ぎ、むしろその調整に苦勞するほどであった。一番具体的になっていたネパールに絞って提案し、支持を得ることができた。

これらの討議過程を集約して、会議の声明文を作成することとなった。インドネシアのもの

をサンプルとして骨子を松香が作成し、数名の方々に手を入れてもらい、フェアウェルパーティーの席上で読み上げることとした（39ページ参照）。

3日目は午前養蜂、午後病気と外敵を扱うセッションを設けた。これらは両方とも講演者のキャンセルも少なく、充実しており、むしろ発表数が多いために討論時間が不十分と感じられるほどであった。ミツバチヘギタダニのDNAを調べた結果、アメリカ合衆国に侵入したダニはヨーロッパ経由のものであることを明らかにした発表には（日本からパラグアイに入ったダニがアメリカに移ったのではないかと案じていた者にとって）安堵の胸を撫でおろすことができた。

会議を通しての強い印象は、ベトナムの人たちの熱心さである。会場後部で同時通訳を行っていたため、時としてうるさいこともあったが、イヤホーンに聞き入る人たちも最後まで減らずに、それに基づいて質問もあり、主催者の立場からは大変に有り難いことであった。

全ての発表が終わると、会場を片付け、高級なハノイホテルの1階レストランに場所を移して、7時からパーティー。入場と同時に飲み物を手にしたあとで各種の挨拶が（私たち自身のものを含めて）長々しく、一部は待ちきれずにお皿にも手が出ていた。それでも壇上では、結構長い声明文は読み上げねばならず、ネパールの第4回大会受諾演説や、オランダからベトナムに入れ込んだ形のマルダー氏の特別表彰とその謝辞がいずれも長くて、冷や汗をかくよう

な運びとなった。だからといってももちろんパーティーそのものは和気あいあい楽しいものであった。民族音楽やダンスも堪能し、沢山の記念写真をとりながら解散した。

翌日は1日の見学ツアー。ハノイ市南西100kmほどのニンビン省クフォン国立公園を中心に行くつかの蜂場を訪ねた。朝6時半集合、バス8台に分乗し、パトカーの先導で遠出するのは、2年前のインドネシアスタイルである。目的地付近で2つに分かれ、トウヨウミツバチ蜂場とセイヨウミツバチ蜂場をそれぞれ見学した。近くの小学校に集まって歓迎の挨拶を受けたあと、その周囲の7か所の家族養蜂場を徒歩で回りながら見学。それから国立公園のビジターセンターに移って昼食、暫時を過ごした。公園そのものは奥が深く、探索コースも20kmもあり、植物園や名所もあったが、それを楽しむには少々中途半端な時間のようにも感じられた。最後に、朝に分かれて見学した蜂場の残りの片方に立ち寄ってから合流、次第にやみに包まれてゆく道を、再びパトカーの先導でハノイ目指してひたすら戻る行程であった。



図4 ベトナムからネパールへ



図5 伝統的巣箱を開けてみる

### 第3回 AAA 大会決議と提言

#### AAA の目標と今後の役割

1. 前回到引き続き、本大会において以下の点が確認された。

- アジアは世界で最もミツバチの種とその遺伝的多様性に富んだ地域である。アジア産のミツバチには多くの生物学的、経済的に重要な特徴が見いだされる。
- その全域においてミツバチと養蜂は、持続可能な農業および村落開発計画の中で重要かつ不可欠な要素となりつつある。
- アジア産のミツバチ種については、その生物学的特性と適切な使用方法の理解が現在もまだ十分に進んでいない。
- トウヨウミツバチ養蜂の主な問題点は、生息環境の変化、導入種であるセイヨウミツバチとの競争、サックブルード病などである。
- アジア養蜂研究協会は今後もアジアの養蜂家、養蜂普及振興事業関係者、ミツバチ研究者に対する支援をさらに効果的に行う必要がある。

2. アジア養蜂研究協会は在来でない種のミツバチをこれ以上アジア内の新たな地域へ導入しないよう主張する。とくにセイヨウミツバチについては、以前の導入がアジアのミツバチに病気を蔓延させる結果になったことを考慮し、新たな地域への導入は非常に慎重な検討がなされるよう望む。

3. 以上の点をふまえ、本大会は以下を決議する。

- アジアの養蜂学に関する多様な面の研究、開発を促進するために、より強固な組織作りを促す；トウヨウミツバチの保存と、その養蜂振興のための作業グループをつくり、座長を K. K. Shrestha 氏 (ICIMOD, ネパール) とする。
- アジアのミツバチが花粉媒介することにより、各種農産物の生産性向上にどのように貢献できるのかを研究し、ミツバチ生産物と花粉媒介の経済的価値を算定する。
- アジア地域の全ての研究機関、関係組織に対



図6 決議と提言を読み上げるウォンシリ教授

し、アジアのミツバチ種のうちで経済的価値の高い者を高いものについて、その生物学と養蜂技術の研究に着手するよう促す。

- この地域の養蜂進歩のために適正な技術を共有し、伝播するためのネットワークづくりや、国際協力計画を奨励し、地方ごとの養蜂研修プログラム、講習会、養蜂ツアーなどを企画、推進する；アジア養蜂研究協会は養蜂開発計画や研修プログラムにおいてはその地域で従来行われてきたハチミツ生産技術を基礎にした、在来種ミツバチによる養蜂の普及につとめることを推奨する。
- 前回の決議に続き、養蜂研修と研究のセンターを設立するよう努力する。

#### 謝辞

本大会はアジア養蜂研究協会の各国支部、ヨーロッパ、アメリカ、アフリカなど 26 カ国からハノイに集まった大会参加者を歓迎する。

本大会はアジア養蜂研究協会が今や力強く機能する組織であり、アジアの情報交換システムとして効果的に機能していることを確認する。

本大会はベトナム政府、特に農業・村落開発省、ミツバチ研究開発センターに対し心から感謝の意を表す。そのすばらしい支援、優良な施設の提供、周到な準備と暖かなもてなしにより、本大会は成功し、参加者にとって格別の思い出となった。

本大会は 1998 年の第 4 回大会 (ネパール) 開催を歓迎する。 (松香 光夫)

#### 参考文献

- 吉田忠晴 (1994) ミツバチ科学 15(4): 175-179.  
松香光夫ほか (1995) ミツバチ科学 16(3)123-128.